

女性医師の窓

自治医大卒の女医として

石川県立中央病院研修医
大鋸 梓

自治医大卒の私は、卒後9年間、地域医療に携わらなければならない。

来年度は、いよいよ舩倉島診療所勤務だ。診療所にはスタッフが医師一人だけのため、緊急時も全て一人で対応しなければならない。今はただ、期待と不安で複雑な心境だ。学生時代から、舩倉島で働く先輩先生方の姿を拝見し、将来の自分と重ね合わせ、常に自分一人だったらと考えながら研修を行ってきた。今年の8月には舩倉島総合診療にも参加させて頂き、学生の時とはまた違った視点で島や診療所を見学し、島民とも触れ合うことができた。舩倉島は、「医師は医師である前に一人の人間であり、患者さんも患者である前に一人の人間である」という至極当たり前のことを気づかせてくれる場ではないか。病院で働いているだけでは忘れがちな、しかし最も大切なことである。『病気を診るのではなく、患者を診よ』とはよく言われるが、それを体験できるのも舩倉島ならではであろう。患者さんには各々のライフスタイルがあり、大切な家族がある。一人一人の患者さん・家族の思いを踏まえた上で、治療計画を考えていかなければならない。また、島民と生活の場を同じくすることで、人生の先輩から大切なものを学べる気がする。良好な医師 患者関係を保つことは勿論、一人の人間として、人 人関係を築き、更に島民のニーズに合った医療を展開していきたい。舩倉島での半年間が医師としても人間としても成長し、充実した時間となればと思う。

また、6月に同じ大学卒の富山の人と結婚した。残りの義務年限中に出産、育児をすることになるだろうが、義務年限のことや仕事と育児の両立など悩みは尽きない。世の中に女医は大勢いる(29歳以下では35.8%にのぼらしい)。育児をしている女医も結構いる。僻地医療に携わっている医師もそれなりにいる。だが、「僻地で医者をしてしながら育児をしている」女医はいったいどれだけいるだろうか? 確かに、母校の自治医大でも近年女性が増え、卒業生のための女性医師メーリングリストもある。が、情報が少なすぎる。ネットで検索してみたが、そのような情報はほぼ皆無であった。医師として大丈夫か? 育児と両立できるのだろうか? 子供が病気になったらどうしたらよいのか? 預けられるのだろうか? と。大学時代の先輩女医さんが、実際に僻地での子育て奮闘記をネット上で公開している。私と同様の不安感から少しでも後輩の役に立てればとブログを書き始めたそうだが、私にとっては非常に有り難く、不安も如何ばかりか解消されている。色々な問題や心の葛藤がリアルに伝わってくるため、最近はブログを見るのが日課になっている。女性の社会進出が進んだと言っても、実際日本では、出産・育児をしながら働き続けるための制度も環境もまだまだ十分ではない。女性が出産・育児をしながら男性と同等に働くには多大なる努力が必要だ。

将来、いったん離職して再就職を検討しようが、より合った職場への異動を考えようとも、医師を志した思いとこれまでの経験全てを誇りに思いつつ、新たな挑戦や失敗を楽しむ心意気で選択をするのであれば、どのような働き方であってもキャリアの積み重ねに繋がるはずだ。そのためには、どのような勤務形態を選択するにせよ、その時間が満足度の高いものとなるように、最大限の努力は注ぎたいと思う。